

今日のみことば

□ 11月6日(日) マタイ 12章

パリサイ人はイエスのよき業が明らかであるにもかかわらずイエスを悪魔の手先としました。彼らはかたくなにも聖霊のみわざを否定し、自らの罪の赦しを不可能なものとした。

□ 11月7日(月) マタイ 13章

主はこの種のたとえ話を通して、神のみ言葉を聞く人々の心について教えられている。主はなぜ多くの人が福音を受け入れないのかを示されています。

□ 11月8日(火) マタイ 14章

この五千人を養う奇跡は四福音書が共通して記録している唯一の奇跡です。これがいかに強烈な印象を与え、重要な意味を持つ出来事であるかがわかる。

□ 11月9日(水) マタイ 15章

最初から宗教についてのイエスの教えはパリサイ人と衝突していた。パリサイ人にとって言い伝えは義務であった。それが聖書の教えの緩和であるとき、イエスは躊躇なく非難された。

□ 11月10日(木) マタイ 16章

イエスはご自分に対する信仰告白を導き出されてから、ガリラヤに戻ると、ご自分の死と復活について語られ、ご受難の準備に入られた。

□ 11月11日(金) マタイ 17章

イエスはペテロの告白をさかいに、弟子としての条件と約束を提示されたが、これから起こる出来事に弟子たちを備えるために、驚くべき変貌をなされた。

□ 11月12日(土) マタイ 18章

神の国は、この世の基準とは全く異なった基準で運営される地位は求めない弱肉強食は通用しない。霊的弱者の責任は強者が持つ。神にゆるされた者は無限に他人をゆるさねばならない

ろ ぼ No. 1788
2016年 11月 6日
日本バプテスト 立川キリスト教会
牧師 大川 博之

ヨハネ11:25

わたしは復活であり、命である。私を信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれでも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。

ラザロが墓に葬られて四日目にイエスはやっとその姉妹であるマリヤとマルタの家に来て下さいました。マルタはイエスに、「主よもしここにいてくださいましたらわたしの兄弟は死ななかつたでしょうに。」と恨みごとを言ったときにイエスは、「あなたの兄弟は復活する」と言われました。慌ててマルタは「終わりの日の復活の時に復活することは存じております」と答えました。その言葉を聞かれたイエスは、「わたしは復活であり、命である。私を信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれでも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」と言われたのでした。イエスは私たちに、どのように死と向き合っているかを問われる

のです。今日、先に天に召されていった信仰の先達たちのことを、心に覚えさせていただくのです。多くの先達たちのいろいろな思い出が胸によみがえって来ることです。先日、陳 姉が集会が終わって、さっき讚美歌を歌っていた時に、何か心にかかるものがあって、何かと思い巡らしたときに、主人が好きだった歌だったことを思い出したと話してくれました。「静けき河の岸辺に」です。これが私たちの先達たちからの慰めと励ましをいただくときでしょう。そしてマルタがイエスに言ったように、やがて「主の日」に私たちは会いまみえる時を過ごさせていただくことができる、その信仰に生かされています。

そのマルタの言葉にイエスが告げられた言葉は、「あなたはこのことを、信じるか」でした。マルタは「はい、主よ、あなたに世に来られるはずの神の子、メシヤであるとわたしは信じております」と答えました。今日の聖書拝読においては、この言葉は読まれませんでした。私たち自身の言葉での答えを語りたくと願ったのです。

パウロは主が再びおいでになる光景を、テサロニケの信徒への手紙の中で「その言葉に基づいて次のことを伝えます」4章の13節以下で述べました。そこでパウロは、先に眠りについて者たちと共に、私たち生き残っている者も、空中で主とで会い、彼らと共に一緒に雲に包まれて引き上げられ、私たちはいつまでも主と共にいることとなります、と語ります。私たちはここに述べられた言葉によって励まし合うのです。

あるクリスチャンが病が重く病院で死を迎えようとしていて牧師が呼ばれました。彼は牧師に「先生、僕に聖書の言葉を書いて下さい」と頼みました。牧師はいろいろと考えたすえに書きました。「神は愛なり」と。彼はそれを見て浮かぬ顔をして「先生、＜汝の罪ゆるされたり＞と書いてくれませんか」と言ったそうです。まもなく死を迎えようとしている人にとってはこの宣告こそ何よりの慰めでしょうが、神は愛であり、信じてしたがってくる者を、豊かに慰め顧みて下さる。主は私と共にいて下さいます。主は私たちはさらなる高みへの導いて下さるお方です。

————— 《 聖書の学び・祈祷会 》 —————

詩篇32 大いなる赦し

詩篇1では、律法に従うことの幸いが述べられたが、ここでは神によって罪が赦される幸いが述べられている。新約聖書では死とパウロが行いによらず、神の恵みによって罪が赦されるという教えをここを引用しながら述べている。

この詩篇は罪ゆるされた者の「感謝の詩」である。そのことは罪の苦悩の中にあつてその赦しを求める現在の苦悩を歌い上げたものではなく、その罪がすでに赦され、過去において罪の問題が解決されたことからささげられた感謝の歌であることから推察される。

隠された咎は、耐えがたい重荷となるが、罪の告白と赦しは心に喜びの光をもたらす。詩人ダビデは、信頼して神に祈ることを他人にも勧める。私たちの頑固さはつねに神に打ち破ってもらわねばならない。罪の世の現実には悲しみが多い。しかし主により頼む者は、恵みで囲まれる。



Read God's Word.